〔嬉遊笑覽十上飲食〕說文曰、饋以羹澆飯也、これ汁かけ飯なり、こゝにてむかし汁をば飯にかけてくひしなり、略○中悔艸に貴人よりはやく汁などかけず、湯をのむとも見合て、はしを下におくべしなどいへり、

〔宗五大草紙上〕人の相伴する事

一人の相伴の事、貴人の前にて、めし又何にても相伴あらば、物のすはるまでは、ひざを立て可有、膳すはり候はゞ、ひざをくむべし、略○中飯又看取おろして疊にをく不可然、先箸を取ながら、飯ならば汁をかけ、湯をのみ、箸ををくまで貴人を見合、貴人より先にてあるべからず、箸を取をく事も同前、

一人前にて飯くひ候やう、さま〳〵申候由候へ共、前に申ごとく貴人を見合てくひ候べし、略○中武家にては、必飯わんに汁をかけ候、汁をば本膳又二膳にても候へ折敷へ、分候べし、こわんに分候事なく候、出家は必ひやしるわんにつけて御參候、出家も在家も内々にては、何としても不苦候、

〔貞知天正記〕一食の時よび出され、相伴に出候はゞ、めしのかさをとり、めしのわんの下に置、持出座敷になをし候て、食を二口三口ほど給てより、其まゝ汁をかけ候て交用申候、無隔心所にては、再進もたべ候事も有べし、其にも汁をばかけてたべ申候、

〔伊勢守貞孝朝臣相傳條々五〕一精進のめし、寺などにて食を折敷へわけず候、小汁椀にてもわけて、汁をかけよく候、よき程にて、さいしん請候時、其心得にてまいるべき程うけてまいるがよく候、略○中

一めしに汁かくる事　かきまぜずして、かたくつしニにくらふべし、くいはつる時、白いゝを少殘して置なり、